

コールドウェルの作品における「神」

清 水 春 雄

I

現存の、しかもなお盛んに書きつづけている作家を対象とする場合、その作風について或る程度断定的な評を下すことは、少なからず危険を感じさせられる。しかし、或る作家が作家活動を中心としての自伝的な作品を書いたとすれば、それはその作家が仕事の一段落を自覚しているか、或は従来態度をもって一応満足すべき階梯に達したものとして、回顧的な心境に浸っているものと解することが出来よう。

コールドウェルは、そういう意味の回顧的な作品として *Call It Experience* (1951) を著わした。最近の作品 *Gretta* (1955) や *Certain Women* (1957) は、彼の所謂「南部もの」の作風を延長したものに過ぎないと感じられるのであるが、果せるかな彼は、雑誌 *The Atlantic* (July 1958) の会見記で、「南部についてのシリーズと思うものは、もう終わった。最近書いた二、三の小説は一般的にして、アメリカ中部を舞台としてある。」と述べ、その例として *Gretta* や *Certain Woman* を挙げている。これらは正に、南部ものの作風をただ舞台を移しただけと見られる作品である。

コールドウェルは、言うまでもなく、アメリカ最大の人気作家の一人である。上記会見記によれば、彼の作品は全部で4,000万部以上売れているが、そのうち *God's Little Acre* (1933) だけで800万部を超え、今世紀最高のレコードを示し、その他 *Tobacco Road* (1932) や *Journeyman* (1935) 等も、それぞれ、アメリカ版だけで、3～500万部が捌けていると言う。ところでこれらはすべて彼の初期の作品である。これらの事実に基づいて、コールドウェルの作家としての生命は、その初期に於て燃え盛ったものと断しても早計ではないよ

うである。いまこの点を検討しようと思う。

彼は上記会見記の中でこう言っている。「私は自分の作で、何かを訴えようとしているのではない。しかし、多くの人々は私の知らないことを作品の中に見出すようだ。私はただ物語の作者なので、それ以外のものではない。ただ自分に興味のあるように書こうと思っているだけだ。何かの改良を目指している訳ではない。或る観念を押し売りしようとも思わぬ。私はただ私の見た通りを描き出そうとしているだけだ。読者は私の気付かぬことをその中から汲み取ることであろう。」即ち腹には何もないと自ら言っているのであるが、その作品、殊に初期の作品は読者に多くのものを汲み取らせる。否、多くの意味に溢れている。

Tobacco Road や *God's Little Acre* に現われている幾多の経済的な社会抗議性はどうかであろう。それらこそソ聯に於ての彼の人気を沸かしたたしめた要因ではなかろうか。これらの作品にはまた多分に倫理的な社会抗議性が含まれている。その点では例えば、黒人少年に対する白人娘の横暴振りを描いた *Trouble in July* (1940) の如きは、当時のナチ独乙に於て、反米感情醸成の宣伝材料として利用されようとした位、抗議性の強いものである。作家が最初から意図していたか否かにかかわらず、作品に現われた意味を、或はそこにあると見た意味を擱んで、批評検討の対象にするのは評者の仕事である。それは作家が見たままを描写するという態度と通ずるものであろう。事実はこのように幾多の訴えが聞こえるのであるが、今はそれらの訴えを中心課題とせず、作家の作風態度の推移を見究めるのに好材料と思われる一特徴を捉えて、論じて見たいと思う。その特徴というのは、コードウェルの作品の世界に於ける「神」という観念の扱いかたである。

II

コードウェルの小説では、短篇は別として長篇に於ては、全ストーリーを通じて、主人公が神への関心を示しているものが数篇あるのであるが、この神への関心を持っているか、否かによって先ず作品を二大別して見よう。そうす

るとたまたま1930年代迄の作品には神の観念があり、1940年以降にはそれがないと言える。初期のもの、例えば前記 *Tobacco Road* や *God's Little Acre* や *Journeyman* 等には神があるが、*Trouble in July* や *Tragic Ground* (1944) 等中期のもの、更に降って *The Sure Hand of God* (1947) や *Place Called Estherville* (1949) 或は *Episode in Palmetto* (1950) 等には神が表わされていない。ストーリー全般に亘つての基調をなさないのみならず、脇すじとしても神を中心とした話が現われないのである。これは作の主人公の年令ということも考慮しなければならないであろうが、とにかく簡単に言えば、神は初期の作品にのみ現われていると言ひ得るのである。

Episode in Palmetto に至るまでの彼の長篇は、戦時特派員として、モスクワに赴いた結果生れた二、三の作品を除いて、その殆んど全部が、彼の出生地 Georgia 州を中心とした南部を舞台としている。全作品を通じて、性本能を経糸とし、緯糸には白人貧農と黒人問題を用いてナチュラルスティックに織り出した悲劇的な作品であり、上述の如く経済的な、また倫理的な社会抗議性を多分にもつ文学である。いまこれら所謂南部ものを考察の便宜上三期に分けて見るに、極めて概説的であるが、初期の作品では背景は田園であり、人物は白人貧農 Poor White の一家族を対象とし、文明社会に置き忘れられたような社会（アメリカ社会のエアポケットの如しと言う評者もある）に於ける原始的な行動が描かれている。しかしこれらの農家の主人は何れも神信心の心があり、行動に信念或は神への信頼がある。これに反し後期の背景は小都会であり、人物は、中又は下層の個人、その多くは女主人公であつて、何れにも神がなく、不安と動揺がある。中期のものは初期から後期へのわたりと見るべく、田舎から都会へ移った人々が描かれており、同じく神がなく、絶えざる不安がある。

先ず初期のもの、即ち神のある例から見てみよう。*Tobacco Road* では家長 Jeeter Lester は貧乏で、棉の種子や肥料を買入れることの出来ないままに、6、7年も畑を耕すことが出来ない。貧窮のどん底にあるのであるが、いまに神様が慈悲を垂れて下さるであろうと神への信頼を最後まで変えない。貧窮を見かねた人々が、町へ引越して工場へ通つた方が良からうとすすめ、また妻が工

場行きを希望しても Jeeter は頑として土地を動かさない。その土地も今では借金のかたにとられていて、自分のものとしては一エーカーも残っていない。もとの親方が農業に見切りをつけて町へ引越してしまってから、土地と小作人の家を放りなげるように無賃で使わせているだけである。そういう土地であっても Jeeter の土地への愛着は極めて強く、「俺は五十年も百姓をやつて来た、親父も、祖父も皆同じ血統だ。俺たちレスター家のものは土地を耕して物を作ることが好きなのだ。俺は他の連中のように棉工場なんぞへ行きはせぬ。土地が俺をしつかり掴えて離さぬのだ。The land has got a powerful hold on me. (ch. II)」と言ひ、更に「工場は人間が作ったものだが、土地は神様がお造りになつたものだ。Humans made the mills. God made the land. (ch. III)」
「俺は神様が俺のために造つて下さつた場所を離れはしない。I stay where God made a place for me. (ibid.)」「神様は土地をお造りになつて、そこで作物を作らせようという思召しで俺をここに置いたのだ。The Lord made the land, and He put me here to raise crops on it.……that's what's intended. (ch. XIII)」と、土地への執着は神への信仰になつてながつているのである。彼は自ら、「俺はずつと神信心をして来ているのだ。I been a God-fearing man all my life. (ch. VII)」という通りの男である。

彼は、自分は一生親方のために働いて来た、そして神様にはするだけのことはして来た。その自分がどうしていま無一物になつたのか訳が解らないのである。しかし神様は人間の面倒を見て下さるものであるから、きっとやがて種子も肥料も授けて下さるだろう。Maybe God will send some way to allow the growing of a crop. He puts the land here, and the sun and rain—He ought to furnish the seed and guano, somehow or other. (ch. XIX) 神様は金持が貧乏人から取り上げたものをきつと返して下さるに違いない。そのうちには親切な神様は慈悲を垂れ賜うて、着物でも食物でも不足のないように恵んで下さるに違いない。Some of these days He'll bust loose with a heap of bounty and all us poor folk will have all we want to eat and plenty to clothe us with.……God, He'll put a stop to it some of these days and make

the rich give back all they've took from us poor folks. God is going to treat us right. (ch. I) と揺がぬ神への盲目的な信頼を持ち続けているのである。

Tobacco Road では、この主人公 Jeeter のみならず、その母である老婆も同様神への信仰が篤い。彼女は一家中に殆んどその存在を無視されていて、誰にも相手にされないのであるが、家に煮たきをするものがなくとも、薪を拾って来て、かまどに火をたいておりさえすれば、きっと神様は何か食物を恵んで下さるだろうと信じて、毎日枯枝を拾いに出かけるのである。

Jeeter の末娘 Pearl の婿 Lov も神を怖れるタイプであるが、その Lov が町から買って来た蕪菁を Jeeter が空腹のあまり、すきをねらって奪い取るが、忽ち後悔して来合せた女牧師に神へ赦免の祈りを捧げて貰う。そして彼は、わが家の不幸も、わが魂についての神の試練とみて、きっと神様はいまに大きい恵みを与えて下さる積りであろうと信じている。

次の作品 *God's Little Acre* の一家の大黒柱 Ty Ty Walden は、自分の畑地のどこかに金の鉱脈があるあと信じて、もう過去15年も畑のあちこちを掘り起している。永年畑作を顧みないので、これも非常に貧乏をしている。自分の家族や、作男の黒人二家族の食物や、騾馬の飼料を買う金がなくなって、遂に平素相手にされない長男の所へ借金申込に行くことになるのであるが、このように日々の暮しに困りながらもなお金掘りをやめようとしなない。他人が何と言おうと、彼の自称 scientific な方法で続けて行けば必ずいまに探し当てられると信じている。

先の *Tabacco Road* の Jeeter が神を深く信じていたように、Ty Ty も信心深く、自らも「わしはこれまでずっと信心深い男だった。I've always been a religious man, all my life I have. (ch. II)」と言っているが、彼は27年前、いま所有している土地を買った時、その内一エーカーを神様に捧げるためにのけて置いた。そしてその一エーカーの土地から獲れるものは何でも、毎年教会へ持って行くことにしていた。そしてどんな少ないものでも自分のもっているものは神様とわけ合うことに誇りを感じていた。それが後に、黄金熱にとりつかれてからは、神様の土地を掘り返すことを恐れて、また同時に息子らは神様

の土地で鉦脈に当って金を牧師にとられることを恐れて、その一エーカーを農園中のあちらこちらへと移している。このストーリーの事件の始まりからでも4回以上動かしている。最初は向うの森近くにあるのが、そこを掘りたくなると自分の家の下に移し、次に農場の裏手に、それから次にはまた家のそばに移し、最後には息子の行く先き先きへと移している。このように、たびたび移したり、そこにはいまは何も植えずに放ってあるが、決して神の土地をなくすることはない。これは終始変らぬ主人公の態度である。このように *Tobacco Road* の Jeeter と、*God's Little Acre* の Ty Ty の両者は神信仰と頑迷な自信に満ちているが、それが結局身を亡ぼし或は不幸を招くこととなる。

この二作品の次に出た *Journeyman* に於ては、ストーリーの主人公は巡回牧師で、一応神の道を説き廻っているのであるから、神のイメージが物語り全般にゆきわたっていることは当然であるが、その牧師の活動舞台たる農家の主人 Clay Horey も、Jeeter や Ty Ty と同じく神への関心を示している。神を怖れ神への関心が深いからこそ、怖れ怖れながらも悪辣な *Journeyman Semo* の世話をするのである。

初期の作品はそれぞれ悲惨な境遇にありながらも、心に神を抱いている点に於て信念があり救いがある。救いというのは次のような意味である。

Tobacco Road の Jeeter 夫婦は附近の雑草を焼くためにつけた火がもとで、夜、寝ている間に家と共に焼け死ぬのであるが、その前の晩も、神様が何とかして作物の出来る方法を授けて下さるだろうと確信して、明日こそ騾馬を借りて来ようと厳に誓をたてている。そしてその準備のために荒れた畑に火をつけたのであった。彼は希望を抱いたまま焼け死んだが、その希いは彼の死後、息子の Dude が翻然と親父の血に目醒めて、「俺は何所かで騾馬を一頭と、それから棉種と肥料を少し手に入れよう、そして今年は棉作りをやるんだ。I reckon I'll get me a mule somewhere and some seed-cotton and guano, and grow me a crop of cotton this year. (ch. XIX)」という決意を示すことによって報いられている。Jeeter の生命は息子に受けつがれて、土地への執着が生きて行く。人間と大地との縁がかくして続けられている。Ty Ty も家

族の不幸に拘らず信念を変えず、金掘りを続けることに生き甲斐を感じている。*Journeyman* 中の Clay も妻を汚され財産をかすめとられてもなお牧師 Semon を恨むどころか、反って彼が急に立ち去ったことを寂しがっている。Somehow I sort of hate to see Sermon go away now and leave us. It makes me feel left high and dry. I'm going to miss having him around here for a while to come. It makes me feel lonesome, not hearing him talk and not seeing him sitting on the porch, waiting for Sunday to come. (ch. XIX)

このような初期の作品の結末に比べると、後期の作品は何れも神がなく、心の不安動揺が絶えず、救いがない。例えば *The Sure Hand of God, Place Called Estherville* 及び *Episode in Palmetto* の三作品を通じて神信心の話が出て来ない。三者とも女主人公であるが、信念も常に動揺しており、始終不安の念から逃れられない。そして結局怖れ避けていた運命に、恰も神の確かな手に導かれる如く引き込まれてゆく。結びはすべて決定論的な宿命観を感じさせられるものである。

The Sure Hand of God では、夫に死別して糧道をたたれた女 Molly が、娘 Lily を適当な相手に嫁がせ、自分も出来るだけ早く再婚したいと希うのであるが、昔の身持ちが悪かったという評判が祟って、まともに世間の相手にされずとどのつまりは娘は出奔し、自らは赤線区域の女将となり下る。因みにこの Title の *The Sure Hand of God* 即ち「神の確かな手」というのは Molly の隣家の主婦 Lucy が彼女に向って、The sure hand of God is sending you and Lily both straight to where you belong. (ch. II) と呪いをもって母子の将来を予言している言葉に依るのであって「確かに」という意味に過ぎず、格別神の観念を伴っている訳ではない。

Place Called Estherville では、町に出て仕事を見出し平和に暮そうと、田舎の学校を卒えてやって来た混血児の姉弟が、努めて避けようとする事件を美しきが故に次々と惹き起こし、最後には弟は白人に撲殺され、姉は白人の子を産むに到る。

また *Episode in Palmetto* の主人公はカレッジ出の女教師であるが、彼女は

一二年田舎で勤めてから平和な家庭生活に入ろうと望んでいる。ニューヨークで自堕落な妾ぐらしをしている姉があるが、自分は決して姉のようになるまいと希っている。ところが彼女の美貌が多くの男性の礼讃と女性の嫉妬を招き、そのために着任一週間で、この南部の町に過去数年なかつたようなセンセーションを惹き起して結局避けようとしていた運命に屈して、妻のある男と旅に出ることとなる。

これら三者に共通の不安、即ち寡婦には前身を問題にされて世間ののけものにされ、また闇の女に顛落しはしないかとの懸念。混血児は colored people をねらうことをスポーツの如く心得ている白人社会に於て、如何に彼らとの間に事を起こさずにすむかとの気づかい。女教師は自らも感じている自分の性的魅力が、或は制御を超えて、いつ何時事故を起し、失職を招くかもしれないという不安。いずれも慎しみ深く世を渡ろうとする善意が、彼女らを断えざる不安に陥れている。神がない彼女らの態度は、初期作品に於ける盲信的な態度と、よき対照をなしている。彼女らの不安を助成するものに隣人の監視がある。神の見守りの代りに隣り近所の冷たい目がある。近代人には冷淡非情の一面があるかと思えば、その反面に他人のことに容喙し聴き耳をたて覗き見をする隣人が尠くない。*The Sure Hand of God* では隣家の主婦 Lucy, *Episode in Palmetto* では、女教師の下宿の向の婦人 Mrs. Yeager が代表するように偏狭な小道德観にたてこもって、所謂小姑根性の如く他人の言動に関心を持つ人々があつてここから現代社会の「隣人の監視」による不安が生まれている。

初期には神と信念があり、後期には神がなく不安があると述べたが、初期は農村が背景で後期は小都会が背景である。そのつなぎに中期の作品がある。*Tragic Ground* や *This Very Earth* (1948) 等がそれである。双方とも農を棄てて、町へ移った一家を描いている。

Tragic Ground では戦時中に農を棄てて都会の軍需工場へ移った者が、突然の工場閉鎖で忽ち貧民街に住まう身となる。郷に入つては郷に従わんとする家族と、なお子女の墮落を防がんとする家族との対比が描かれている。*This Very Earth* では父祖の業たる農を棄てて都会に出るが、正業につかず子女の墮落に

手を拱いている父親の姿が描かれている。共に土を離れた人々の悩み、即ち一度都会の生活に染んだ者の魂は、再び農の素朴に還らぬことを示している。そしてそこに、大地への信頼——神への信仰と共に大地への信頼——が失われて動揺と不安がはじまることを示している。中期のものは、このように初期から後期への過渡的な特徴を表わすものとして意義を持っている。

Ⅲ

以上は、神のあるなしによって作品の特徴に推移のあることを見たのであるが、次に神のある世界の場合について、その神の意義を考えて見たいと思う。

Tobacco Road では神は慈悲深きもの、自分に恵みを垂れ給うもの、自己の外に高きにあつて見守っていて下さるものとして考えられている。*God's Little Acre* の土地を献ぜられる神も、最初は、*Tabacco Road* と同様、外的なものと考えられている。即ち Ty Ty は前述の如く、その土地で出来たものは教会へ持って行って献げているのである。しかしその一エーカーの土地が、都合によつて自由に動かされるようになったのは、Ty Ty の神観に変化があつたと見なければならない。再々土地を動かし、しかもその移し方も極めて簡単である。例えば最初の例で見ると、問題の土地は、その時は畑の向うの森の近くにあるのであるが、息子らがその土地の下に金鉱があるような気がする主張するので、父はもう一度その土地を移すことに腹をきめる。どこに移すかという段になつて、嫁の Griselda が、家の下へ移してはどうでしょうか、どの道、家の下は掘られませんからとヒントを与える。Ty Ty は、それは良い思付きだ。よしここへ移すことにしよう。これでもう安心だ。と言う。居合わせた客の Pluto が驚いて、早くも移したかと尋ねると、Shifted it already? Why sure. This is God's Little Acre we're sitting on right now. I moved it from over yonder to right here. (ch. III) と、いと簡単に手早く片付いている。他の場合もこれと同様である。決して神の土地を失くすることには賛成しないが扱いはこのように手軽に済む。それは彼が神を自分の心の中の問題としているからである。このように外から内への移りは感ぜられるが、なお依然として神

は祈りの対象としての神である。慈悲をかけて下さる全智全能の神として仰がれているのである。Ty Ty の長女の夫 Will が、俺は全能の神の如く強いと叫びつつ、Griselda に迫る場合の神と同じである。Will がストライキで会社側に殺されて、身内に不幸がはじまった時、これを Ty Ty は神罰と感じて、神の土地を森の向うから自分の足もとに寄せ、人間が死ぬ時は、神様に対する信心だけが慰めである。When men died, he could find consolation only in his love of God. (ch. XVIII) と言っているが、この通り神は信心の対象としての神である。Willの人となり回想して Ty Ty が、神は二種の間人をお作りになった。工場向きの人間と、農業向きの人間と。そんなことは考えても見なかったのだが、どうもそんなように思われる。Maybe God made two kinds of us, after all. It looks like now, though I used to never think so, that God made a man to work the ground and a man to work the machinery.

(ibid.) という場合も、神は全能の神である。ここまでは、このストーリーを通じて神の考えに内外或は主客の相違はあっても、Almighty God の意義には違くない。

しかし神が二種の間人を作られたので、Will は工場向きの人間だが、わしは土地向きの人間だ。わしらは全く違うのだと Ty Ty が述懐したのに対し Griselda—Ty Ty の息子 Buck の嫁あてって、Will が撃たれる前の夜、Will の劇しい男に従った女であるが、その女が髪に向ってこう言う。「お父さんとウイルとは、すべてが違っていたわけではありません。あなたとウイルはほんとうの男でした。女というものは、相手の男があなたやウイルのようであれば、ほんとうに愛することが出来ません。A woman can never really love a man unless he's like that. (ibid.) ああいうことをさせるのは、人間の中の神様でしょう。とにかく、何か大事なものののです。わたしもそれを持っています。It must be God in people to do that. It's something, anyway. I have it now. (ibid.) 夫のバックは全然人間が違います。あんな風であるかないかは、そもそも生れつきの問題です。」と言い出す。それで Ty Ty はここに生きる秘密を知った人間がいると痛感する場面がある。この辺り

から Ty Ty 自身の口にする神の内容も一様ではなくなる。

即ち Griselda の言う心の神と同じ意味を持つ場合が現われるのである。その神というのは、本能或は獣性と言った方がよいであろう。先の Griselda の言葉に合せて Ty Ty が、「残念なことに人間のうちには、犬が生れつきもっているようなセンスを持っていないものがある。It's a pity all folks ain't got the sense dogs are born with. (ibid.)」という。この犬のセンスとは勿論本能を指す。彼は Griselda を傍らにして更に述懐を続ける。「人間は自分で自分をだまして、自分は神様がお造りになった通りのものじゃないと信じようとするが、それが困ったことなのだ。教会へ行くと牧師はわしらに色々なことを言って聞かせるが、心の中でよく考えて見ると、そんなことはみんな嘘だらけだということが判る。ところが大抵の人間は心の中が死んでいるものだから、牧師の言うことを自分でも信じこみ、他の人間にも牧師の言う通りの生活をさせようとする。神様の思召し通りの生き方をするのが、ほんとの人間の生き方なのだ。ひとりで静かに坐って自分の内部にあるものを感じる。それがほんとうの生き方だ。感じる事が大事なのだ。People ought to live like God made us fo live. When you sit down by yourself and feel what's in you, that's the real way to live. It's feeling. (ibid.) 人間は神様の思召し通りに、自分自身で感じなければ駄目だ。生きる道を教えて下さるのは頭だって言う人もあるが、それは違う。頭には感じることは出来ない。頭で人に恋することは出来ない。」と言う。結局その感じるというのは、心の声を聞け、即ち心の神の思召し、本能の叫びに従えと言っているのである。

Ty Ty は、息子 Buck がこのセンスに欠けているために、嫁の Griselda との仲がうまく行かないことを憂いて、息子にこう説いて聞かせる。「心の中に神をもてば、生活は夜ひる努力する甲斐があると感じる。神様といっても教会で牧師のいう神ではない。心の中の神様だ。生きて行くのを助ける神様だ。When you get God in your heart, you have a feeling that living is worth striving for night and day. I ain't talking about the God you hear about in the churches, I'm talking about the God inside of a body. (ibid.)」三

男の Show が傍から、「お父さんは神様の話をするが、そんなら何故教会に熱心に通わないんですか。神様は一セントも貰っていないでしょう。」と野次ると、「わしが教会へ行かなくとも、神様は別にどうも思いはしない。」と答える。Buck が、その話は Griselda と何の関係があるかと、つつこむと、「別に関係はないが、グリゼルダはもうその話はよく知っている。」と答弁する。そして「神様の喜ぶのは、男女仲よく暮すことだ。それは世の中が滑かに動いている証拠だと神様がお解りになるのだ。お前も寝る前に膝まずいて神様のお仰ることをよく聞けば、グリゼルダと仲よく暮すにはどうしたらよいかを教えて下さる筈だ。」と本能の叫びに従うことを説いている。こう説いても男の子らには解らない。Ty Ty もさじを投げて、「わしには説明がむずかしい。言葉の使い方も知らないし、知っていても、こいつは自分で感じなければならぬことだから、話して聞かせても大した役にはたつまい。ちょうど誰かが言ったようにそれはそこにあるか、それともないか、二つのうちのどちらかで、それ以外にはどうしようもないというものだ。It's there, or it ain't there, and there are only two ways about it. (ch. XIX) お前たちはないような顔をしているが、いつかひとりで考えたら解るようになるかもしれぬ。」と諭す。息子は父の言うことは何のことかさっぱりわからないと答える。こういう言っても解らぬセンスの問題は、心の神と言われてもいるが、同じく心の神でも、全能の神とは別の意義であって、いま仮りに狭義の神と名付けておこう。

ところでこの *God's Little Acre* の最後の章では、外の神とセンス、即ち広狭二義の神が同一述懐の中に現われている。それは、妻を奪いに来た兄を殺した Buck と、その妻や妹を前にしての Ty Ty の言葉である。「神様はこの世の中で一番美しい娘を三人もわしに恵んで下さった。神様はその点ではわしによくして下さった。わしがそんな値打のないことは自分でも承知しているんだ。だがその償いに神様はわしの心を悲しませる。良いことと悪いこととは、手をつないでくるものらしい。……神様はわたしらを動物の体にお入れになって、人間らしく振舞わせようとなさった。それが、間違いのはじまりだった。

God put us in the bodies of animals and tried to make us act like people.

That was the beginning of trouble. (ch. XX)」ここまでは広義の神であるが同じ述懐が続いて次の通り言う時はもうセンスを指している。「内部からの自分を感じながら、しかも牧師の言うことを聞いていたでは、人間は生きて行かれない。両方一緒に出来るものではない。どちらか一方しか出来ないのだ。A man can't live, feeling himself from the inside, and listening to what the preachers say. He can't do both, but he can do one or the other. (ibid.) 神の思召し通り生きて、体の内に自分を感じるか、それとも牧師の言う通りに生きて体の内は死んでいるかだ。人間は最初から体の中に神様を持っているのだ。だから牧師の言う通りの生き方をしなければならぬとなると面倒な事が起きるのだ。He can live like we were made to live, and feel himself on the inside, or he can live like the preachers say, and be dead on the inside. A man has got God in him from the start, and when he is made to live like a preacher says to live, there's going to be trouble. (ibid.) 息子たちがわしの思う通りしてくれたら、こんな騒ぎは全く起きなかつたらう。娘たちは良く解っていて神様の思召し通りの生き方を喜んでいるんだ。……男でも女でも、自分でいつまでも独占しようとしたら、一生涯、悶著や悲しみばかりが続くだろう。」と極言する。この言葉は悲惨な事件に直面しての感懐で、どぎつい表現で「性」の自由を強調しているが、Will にも同じ考えを述べさせている場合がある。Griselda を妻にしている Buck について He can't use her all the time. (ch. V) と言っている。

その Will が、後に機会を得て Griselda に対する時、俺は神の思召し通り裸の姿でお前を見るのだと、Griselda の衣服を次々に引き裂く。狂気の如く手早く細かに引きちぎる。身につけていたすべての衣類は、プリントのボイル地の服も、白いスリッパも、絹の下着も、細かい片となって部屋中に舞い散る。機織工として一生を織り上げに捧げて来た彼は、今その織物を引きちぎり、ひきちぎりして、もとの一本の繊維にひき戻している。衣ころもきせる人間の所行に呪いあれというが如くに。傍にいる二人の女たちは、激しい命の息吹きが怒濤の如く部屋を吹きまくって行くのを感じ喘いでいる。男の Pluto はただ呆気にとら

れているだけで、それ以上の感動を示さない。これは女たちは Will の激しさに神を感じていることを示す。Will が Griselda を抱えて隣室に去ったあと、Will の妻 Rosamond が意外に美しい清朗な表情になっているのは、自己も共に感じた神即ちその絶対者の前には、相対的な人間的な嫉妬の感情など現われる隙がなかったものと解すべきであろう。

この神は狭義の神である。性的本能の意である。この通り広狭二義の神が、Ty Ty の一連の述懐の中に現われるのであるが、最後に Buck が兄殺しの罪を清算すべく銃を持って立ち去るのを見て、父 Ty Ty は Buck の行く先き先きへ神の土地がついて行くようにと祈る。即ち広義の神に立ち返っているのである。

このように *God's Little Acre* では、殊にその最後の章に於て、広狭二義の神の觀念が順次に或は交錯して説かれているのであるが、ここにこの両義の神が一本の姿で捉えられているストーリーがある。それはコールドウェルの次の作 *Journeyman* である。

Journeyman Semon の泊る家の主人 Clay は広義の神の存在を認めているが、自分の心のものとしての信心はない。他の村人もほぼ同じ状態にある。この人々に信心を起こさせるために、即ち各人の心の中に神を持たしめるために牧師の Semon が狭義の神を利用する。即ち動物的本能、殊にその性本能を刺戟し利用すると見られる場面が現われる。(ch. 17, 18) Semon が部落の小学校を借りて説教をする。罪深い人々を救いに来たと実話として例を挙げたのが或る少女が男に誘惑され純潔を失う話で、その経過を細かに説明する。そして女は美しい顔の裏に罪をかくしている、いま悔い改めなければ明日にも死んで地獄の苦しみに陥るであろうと説く。興奮した聴き手の一少女 Lucy Nixon が突然叫び出して着物を引きちぎり始める。Semon は彼女を壇上に連れて来る。信心に入ろうとして裸で身もだえする女を会衆に示す。並いる女も男も興奮の坩堝にたたきこまれ、一樣に彼女の狂態に合わせて身もだえ始め、のたうち廻る。男は駿馬の如く躍り跳び廻る。正に性の感激の場面とも見られる。そこでは変則ではあるが性本能の満足と宗教的発心とは合体している。こうして Semon

は集まった約40人の人々の魂を救ったことになっている。ただ Clay の前の妻で現在 whore である Lorene だけは、性に飽いているだけに、Semon の努力にもかかわらず、遂に発心に入らずにしまうが。如何に村人が満足したかは、農家の主人 Clay が自分の重なる被害にもかかわらず、なお牧師が急に立ち去ったことを寂しがっている所からも察せられるのである。

IV

神への帰依に性的興奮を利用したと見られるこの作を最後として、コールドウェルに於ける神も、また顕わな性的行動の叙述も、その novel の世界から影をひそめた。

ここに彼の作に於ける神の観念の消失と、ナチュラリズムの後退が同時的である理由が存在していると思われる。それは考えて見れば性本能は種族的衝動であって個人の意志を超えている。Immanent Will の現われと見られる。このように宇宙的意志の現われと見れば、それは所謂神 Almighty God の属性の一つであると考えられる。結局いままで述べ来った広狭二義の神とは、とりもなおさず神の実体とその一属性という関係になる。このように見れば性本能に神を見ることの合理性もうなずかれる訳であるが、性の自然と神の合体を描いたことによって、コールドウェルの自然主義的描写の態度は限界に達したとも思われる。前述の通り舞台が土地を去ると共に神も失われたことにより、余りに神がかりとなった性本能の描写も失われ、こうしてコールドウェルの世界ではナチュラリズムの後退が始まっているのである。これはナチュラリズムの作家と目されるコールドウェルにとっては致命的な問題であると思われるが、その作家としての生命を扼するかに見える鍵が「神」にかかっていたということになる。これは牧師の子としての彼にとって奇しき因縁のように思われる。

Georgia 州から舞台を他へ移してから後の作品の傾向について一言すれば、さきに萌していたヒューマニスティックな要素が依然として続いていると言うことが出来る。相も変らぬ中心テーマの性についていえば、動物の軀に神が宿っていると解するのではなく、人間(反省出来る人間)の軀に悪魔(抗し難き力)

が宿っていると解する態度である。例えば *Gretta* の如きがその好適例である。これはある商社の秘書をしている題名の一女性を主人公としている。彼女は結婚の幸福に泣き、良妻たることを心から希いながらも、身につけている悪癖のために夫を裏切る結末となる。彼女には小さい時から特異な靴下の脱ぎ方をする癖があり、それが男性への大きな魅惑であった。その魅力への讃辞を聞くことが彼女には抗し難き飢えか渴きの如きものであった。そのために重なる不幸が起きるのであるが、彼女の側にその悪癖に対する反省や自制の努力が屢々表明されている。即ちこの作の主人公も人間的なモラルの故に絶えざる不安に脅えている女性であるという点に於て、さきの三人の女主人公と同じ系列に属するのである。

備考 本稿の大要は1954年、第26回日本英文学会に於て口頭発表を行い、一部は「英語評論」(篠崎書林、Vol.2, No.4)に掲載したことがある。その後の作家の活動を見て、ここに加筆整理することとした。